168. スクリーニングVTR併用UGI検査法における臥位回転透視の検討

Investigation of the Recumbent Positional Rotation Fluoroscopy of Screening Method Using VTR in UGI Series

東京顕微鏡院 ○古明地 彰・中山 弘・阿部安宏・真崎 正・鶴見利行
(Akira Komeiji)

東邦大学放射線医学教室 木暮 喬

【目的】第19回秋季学術大会にて、VTR併用UGIの胃部における臥位回転透視の記録が、重要であると報告した。その際、回転方向の左右差について問題提起があったので、その意義を確実にするため検討を加えた。

【方法】現在行っている臥位回転透視とは、被検者を右側臥位からゆっくりと左回りで回転し、透視する方法である。これを左回転透視群とする(図-1・左)。今回は、左側臥位から右回りで回転透視する方法と比較した。これを右回転透視群とする(図-1・右)。両回転群をVTR録画し、左回転群7例、右回転群7例、計14例における示現能について再生像を比較した。穹隆部、胃体部、胃角部、幽門部についてバリウムの薄層状態と二重造影像を観察し、示現能を優・良・不良と三段階評価で表した。

- ①バリウムの薄層状態と二重造影像が、広範囲に観察できるものを優(◎)とした(ただし、穹隆部に関しては両回転群とも二重造影像のみ容易に得られるため優とした)。
- ②バリウムの薄層状態、又は二重造影像のいずれかが観察できるものを良(○)とした。
- ③バリウムの通過が速く、薄層状態と二重造影像が観察できないものを不良(×)とした。これは、バリウムが一気に流れ出し、瞬時に胃内を覆いつくして、薄層状態と二重造影像が得られない状態。

薄層状態は、バリウムが薄く粘膜面に行き渡った状態とした(図-2・左)。二重造影像は、胃壁の伸展又は胃内壁の凹凸が表れている状態とした(図-2・右)。

【結果】示現能を各々比較した結果、表-1のごとく、

- ①穹隆部は、両回転群とも良好な二重造影像が得られた。
- ②胃体部前壁は両回転群とも差はない、後壁は左回転群が優6例と著明な差となった。
- ③胃角部前壁は両回転群ともそれほど差がないが、後壁では左回転群の方が良い結果となった。
- ④幽門部前壁は若干左回転群の方が良く、後壁では左回転群の方に優が得られていた。
- ⑤前壁に限ってみると、両回転群に明かな差は見られなかった。

【結論】以上により、右回転透視は左回転透視に比べバリウムの薄層状態と二重造影像を捉えにくい。従って、診断に貢献させる立場からみると左回転透視法は、示現能に優れていると考える。

図-1 臥位回転透視

図-2 薄層状態と二重造影像

表-1 臥位回転透視法における胃粘膜の観察
- 左回転・右回転の対比 -

左回転群 (7例)	部位	右回転群 (7例)
7	穹隆部	7
◎ 0 ○ 0 × 0		◎ 0 ○ 0 × 0
4	前壁	4
3	後壁	3
6	胃体部	6
◎ 1 ○ 0 × 0		◎ 1 ○ 0 × 0
4	前壁	5
3	後壁	2
4	胃角部	7
◎ 0 ○ 0 × 0		◎ 0 ○ 0 × 0
4	前壁	3
3	後壁	4
3	幽門部	6
◎ 1 ○ 1 × 1		◎ 1 ○ 1 × 1

参考文献

- 中山 弘・他：スクリーニング上部消化管検査におけるVTR録画検査法のバックアップ機能について 第47回日本放射線技術学会総会 1991.4 京都
- 阿部安宏・他：VTR併用UGIスクリーニング検査におけるバックアップの意義 第19回日本放射線技術学会秋季学術大会 1991.10 熊本
- 古明地彰・他：VTR併用上部消化管直接撮影における胃VTR画像からみたスポットチャンスのあり方 第19回日本放射線技術学会秋季学術大会 1991.10 熊本